

えっちゅう すいがい  
「越中の土地を水害から守りたい」

# 富山県の生みの親

よねざわ もんざぶろう  
米澤 紋三郎



## 政治家になる決意

1875(明治8)年7月、米沢紋三郎さんの村では、バケツをひっくり返したような激しい雨が続いていました。4、5日たつても雨は止まず、黒部川の水かさはどんどん増してきます。「たいへんだあ。堤防が壊れたぞ」

ガラガラガラ！ ゴーツ！

大きな石が川底を転がりながら押し寄せ、赤茶色の泥水が高波やうず巻きになって、木々を折り倒し、家をつぶしていきます。

「わあ、助けてくれ」

村人たちの必死の働きや願いもむなしく、激しい川の流れはだんだん堤防を壊し、左岸の村々をのみこんでしまいました。

苗がすすくすく伸び始めた水田も、人々の命も、大切なものがたくさん奪われてしまった。

水害のたびに、田畑や家族を失って悲しむ人々を見るのは、もう嫌だ！  
一刻も早く、川の工事をするためにまず、石川県から「越中の国」を独立させなくては。

富山県の誕生日を知ってるかな？ データによると、1883(明治16)年5月9日だよ。

富山県は石川県から独立したんだよね。

独立のきっかけは、何だったのかしら？



見出しの名前には旧漢字を使用しています。

米沢紋三郎さんのミニ年表

西暦	年齢	
1857年		入善町に生まれる
1875年	18歳	黒部川洪水のため堤防決壊。水田数万町歩が浸水する
1881年	24歳	兄が病死したため、生家へもどり、紋三郎と改名する 石川県会議員となる
1882年	25歳	分県運動実行委員長に選ばれ、分県建白書を作成して上京する
1883年	26歳	富山県会議員となる
1885年	28歳	富山県会議長となる
1896年	39歳	入善銀行をおこし、頭取となる
1903年	46歳	衆議院議員に当選し、立憲政友会に入会する
1929年	72歳	亡くなる

子どもの感想

紋三郎さんはまだ若かったのに、富山県を作るためにたくさんのお金を使ってやり遂げたのです。すごいなと思いました。

最初、わたしは、富山県が石川県の一部だったと知ってびっくりしました。そして、どうして富山県を分けなくちゃいけないかったのかと不思議でした。

でも、紋三郎さんは洪水の被害を目の当たりにして人々が幸せに暮らせるようにしたいと思ったから、がんばれたのかなあと思いました。わたしも、将来、人の役に立つことをしたいなあと思っています。  
(入善町立黒東小学校5年 永井有紗さん)

紋三郎さんは、じつと考え込んでいました。

越中には、大雨のたびに洪水を起こす川がたくさんあり、人々を苦しめている。これを防ぐには、治水工事が必要だ。よし、治水工事を議会で取り上げてもらうために、県の議会の議員になろう。

こうして、紋三郎さんは人々のために働くことと決意をしたのです。



「水害に困る人々」明治期の大規模な水害は約50回もありました。(入善町立黒東小学校5年 高島いづみさん)



分県の必要性を政府の高官に訴える紋三郎さん。(入善町立黒東小学校5年 石垣貴大さん)

まずは独立を勝ち取ろう！

このころ、現在の富山県は「越中の国」と呼ばれ、石川県の一部でした。そのため、紋三郎さんも石川県の議会の議員になったのですが、議会に出席して驚きました。

「今すぐ、しっかりした堤防を作らなくてはならない」

「何を言うか。越中はだまつとれ」

議会では、治水工事が必要だと叫ぶ越中側の議員と、道路整備が先だという加賀・能登側議員の意見が対立していたのです。

越中の代表の数は、加賀・能登の半分以下です。これでは、多数決で負けてしまい、いつまでたっても治水工事は後回しになってしまいます。

紋三郎さんは、いらだつ気持ちを抑えながら、一生懸命に考えました。

「治水のためには、まず越中が石川県から独立する運動をおこなわなければならない」

紋三郎さんは分県運動(独立するための運動)を進めようと決心すると、自由に活動するために、せっかくになった石川県の議会の議員をやめてしまいました。

熱き思いを込めた建白書

さまざまなた町や村から人々が集まり、分県運動の具体的な計画を立て始めたとき、紋三郎さんはその代表に選ばれました。

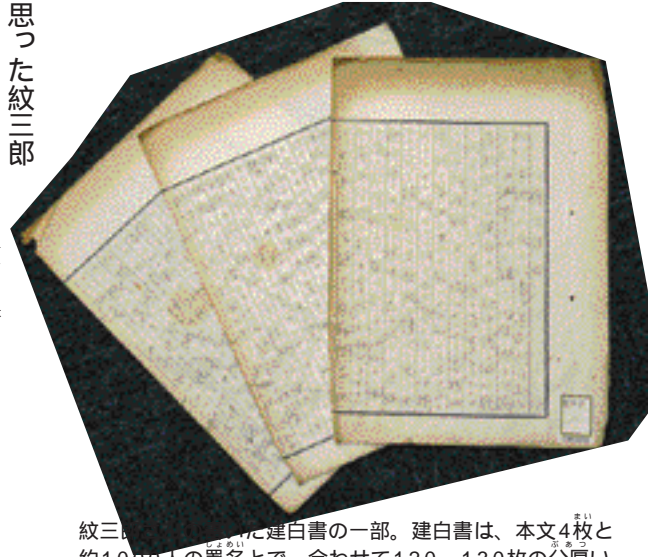
「どうして富山県の独立が必要なのかを、政府に分かってもらわなければならない！」

紋三郎さんは、大臣への建白書(意見書)を書く大役を自ら引き受けました。





建白書を一生懸命に書いている紋三郎さん。  
 (入善町立黒東小学校5年 白又陽平さん)



紋三郎さんが出した建白書の一部。建白書は、本文4枚と約1000人の署名とで、合わせて120~130枚の分厚いものでした。

大事な建白書をじっくり書きたいと思った紋三郎さんは、高岡にある妻の実家に閉じこもりました。眠ったり食事したりする時間すら惜しんで、ひたすら文机に向かつて取り組んだのです。

目を閉じると、浮かんでくるのは、洪水の被害にあつて泣き叫んでいる人々のことばかり。紋三郎さんは、わき目もふらず筆を走らせました。

そして、10日目。紋三郎さんは、ついに建白書を書き上げました。

## あらゆる苦難と戦いながら

当時、建白書を受け取ってもらえるのは、月に何日かに限られていました。そこで紋三郎さんは、まず建白書を送り、その後、大臣に会って直接訴えるという作戦を考え出しました。

紋三郎さんは、激しい波が打ち寄せる海岸や険し

「あんなにたくさんの方が待っているんじゃないかと、とても無理だ」

「いや、明日こそは会えるさ」

あせる気持ちと絶望感で押しつぶされそうになりながらも、紋三郎さんはあきらめませんでした。

何度も何度も会いにいき、ようやく会うことのできた大臣に、越中の困っている様子や分県の実情を切々と訴えました。

「よく、分かった。分県について考えよう」

その言葉を聞いて、紋三郎さんは入善にもどって分県のための準備をはじめました。

## 富山県の誕生

1883(明治16)年5月9日、富山県を設置する

い山道を歩いたり、汽船や馬車、人力車を乗り継いだりして東京をめざしました。1週間以上かかる道のりを、わずか3泊4日です。

しかし東京に着いても、すぐには大臣に会えるわけではありません。なかなかチャンスが訪れず、1週間、10日、と目

太政大臣の名前で発表された布告(おふれ)。これにより、富山県が正式に誕生しました。



富山県は、かつて石川県(人口約180万人)の一部であり越中と呼ばれていました。議員の数も、加賀・能登の47名に対して、22名でした。



**紋三郎さんのエピソード** : 紋三郎さんは、家ではとてもおだやかな人で、幼い孫娘に日本の昔話や中国の本などを、よく読み聞かせたそうです。「嬢や、嬢や、小さいころからたくさん本を読みなさい」というのが口ぐせでした。

常願寺川の改修工事を  
指導したオランダ人技師

## ヨハネス・ デ・レーケ



米沢紋三郎さんの願いであった河川の工事を  
実現するには、高い技術が必要でした。そこで  
優れた土木技術をもつオランダ人のヨハネス・  
デ・レーケさんを招いて、当時、大洪水を起し  
していた常願寺川の改修工事を頼んだのです。

デ・レーケさんは、河川の被害を見て回った  
り、水源調査のために立山に登ったりして、工  
事の計画を立てました。実は、この工事計画に  
反対する農民もいましたが、デ・レーケさんは  
調査結果をていねいに話し、説得を続けました。  
はるばる外国からやってきて、富山県のために  
尽くすデ・レーケさんの熱心さは、だんだん農  
民の心に届き、工事が始まることになりました。  
デ・レーケさんは、4年間の工事の間に9回、  
300日以上も富山を訪れ、熱心に工事を指導  
しました。工事は、見事成功。デ・レーケさん  
のおかげで、常

願寺川は人々を  
苦しめる「あば  
れ川」から、「お  
となしい川」へ  
と大変身したの  
でした。

デ・レーケさんは、激しく  
流れる常願寺川を見て  
「これは川ではない、滝だ」  
とビックリしたそうだよ。



晩年の紋三郎さんが昔のことを思い出して話したことを秘書が書いた聞き書。分県運動について詳しく書かれている。



紋三郎さんが書斎として愛用した  
小心庵。もともとは米沢家の  
茶室でした。

という布告（おふれ）が発表されました。  
「やった。ついに念願の分県がかなったぞ」  
紋三郎さんは、やり遂げた満足感で涙があふれそ  
うになりました。  
「しかし、ここからがスタートだ」  
分県をなし遂げた紋三郎さんは、最初の目標だっ  
た県内主要河川の治水工事に取り組んだり、入善銀  
行を作ったりするなど、人々の暮らしを向上させる  
ために働きました。  
また、紋三郎さんは、富山県の議会の議長や衆議  
院議員となって、一生懸命富山県のために尽くしま  
した。  
みんなのために、自分にできることは何か  
。紋三郎さんはそれをひたすら問い続け、行動した一  
生を過ごしたのでした。

紋三郎さんは、治水工事  
を実現するために、一つ  
一つ問題を乗り越えてい  
ったのだね。

治水工事のおかげで、  
台風がきても、川が大き  
くはならんすることが  
なくて、安心です。



明治時代は、新  
しいものがたくさん輸入  
され、人々の生活が大きく変わ  
りました。電気も、そのうちの1つです。  
電気の力は富山の夜を明るくしただけではなく、  
産業の発展にもつながりました。富山県に電力をもたらし  
た人、それが次のページで紹介する初代金岡又左衛門さんです。